

## メルロ＝ポンティにおける「間身体性」の教育学的意義

## — 「身体教育」再考 —

奥井 遼

## 1. はじめに

メルロ＝ポンティ (Maurice Merleau-Ponty, 1908-1961) は『知覚の現象学』(*Phénoménologie de la perception, 1945*) の序文において、「哲学とは己れ自身の端緒のつねに更新されていく経験である」<sup>1)</sup>と打ち出し、その後展開されていく現象学の立場および使命を定めた。世界から切り離された抽象的観点に立って思考を進めることをかたくなに拒み、世界の内にある自己を手放すことなく、問う自己を絶えず問われる自己として曝し続けたメルロ＝ポンティの努力は、哲学をして、あたかも背丈が伸びるにつれて世界の見え方が新しく変わる経験に似た、私そのものの更新の経験として位置づけさせた。

メルロ＝ポンティにとって、当時までの西洋哲学に特徴的な立場は、ゆるぎのない絶対的な「私」という拠点を保持し、その上で世界や人間についての時間を越え空間を越えた唯一の真理を追求する立場として映った。あたかも絵巻物を眺めるような態度で「上空飛行」的に人間の生を俯瞰して思索を進めるそのような立場においては、哲学者は主観的な「私」と客観的な「世界」とを切り離すことを余儀なくされ、従って私と世界との接触地点について再び考察し直さねばならないことになる。対してメルロ＝ポンティは、私たちが身体において常に既に世界の内に生きているという前提に光を当て、世界と自己との根源的な連続性を考察の出発点に置いた。それは「考える私」そのものが、考えることによって更新される、終わりなき運動を引き受けることを意味する。生をめぐる思索の先に、自己の絶えざる更新を見いだしたところに、メルロ＝ポンティの哲学の歩みが結実している。

現象学をこのように変容の経験として読み込むならば、現象学の歩みと、自己の変容・生成といった人間存在のダイナミズムに大きな関心を注ぐ教育学の企てとの間に、小さからぬ共通点が見えてくるのではないであろうか。メルロ＝ポンティの着想を継承し、身体を経験の基礎として捉え、現象学を典拠としながら教育学を考察する研究にはすでに多くの蓄積がある。とりわけ体育学の領域においては身体をめぐる高い関心が集められており、学校体育という制度の枠の内外で豊かな議論が展開されてきている。本稿は、そのような議論を踏まえながらも、身体教育をめぐる陥穽に留意し、一つの問いを投げかけるものである。

本稿の目的は、メルロ＝ポンティの思索の中から哲学的意志とでも言えるある傾向を読み取り、それを踏まえて「身体教育」を再考する点にある。先取りして論じれば、身体をめぐる教育学的関心は、身体を「教育の対象」として焦点化することで成り立ってきた。例えば、身体によるパフォーマンスや表現を向上させるために、身体メカニズムや動作のモデル化を

めぐって知的関心が注がれる、といったように<sup>2)</sup>。しかしながら他方で、メルロ＝ポンティは、身体は人間が世界の内に繋ぎ止められる「錨」<sup>3)</sup>であって、いつも私たちの生を形作っている一つの働きであることを見て取った。メルロ＝ポンティの声に耳を傾け、身体がそのような働きを持っていることを踏まえるならば、身体とは「教育の対象」以前の実存であるということになる。とするならば、身体の教育とは身体的能力を引き出す働きかけであると見なす捉え方を、あるいは離れる必要があると考えてもよいのではないであろうか。

そこで本稿では、身体の改善を通して教育的効果を指向する視点とは別の視点を模索し、「教育の対象」からは常に抜け落ちてしまう「錨」としての、すなわち人間の生を形作る動きとしての身体を浮き彫りにすることを目指す。具体的な道筋は以下の通りである。①これまでの研究の蓄積を基に、身体の教育をめぐる中心課題を浮き上がらせる。②それに対する考察の軸として、メルロ＝ポンティの議論を取り上げる。特に、後期フッサール (Edmund Husserl, 1859-1938) の「生活世界 Lebenswelt」をメルロ＝ポンティが「生きられた世界 le monde vécu」へと読み替えた痕跡を確認することで、メルロ＝ポンティ現象学の意図を確認する。③「生きられた世界」が有する意義を見いだすために、その後提示された「間身体性 intercorporéité」の概念を、二通りの記述を取り上げて明らかにする。④最後に、それらの議論を踏まえながら、メルロ＝ポンティの「間身体性」に潜在している教育学的意義を検討していく。

## 2. 身体をめぐる教育学的関心

身体の教育をめぐるのは、川村英男が言及した通り「人間は本来心身一体のものであり、精神と身体は別個の実体と考えられるものではない」<sup>4)</sup>という観点が共通の問題関心となってきた<sup>5)</sup>。というのも、体育学における関心は、戦前の体育学を基礎づけていた前提を刷新するところに長く力点が置かれてきたからである<sup>6)</sup>。その前提とは、精神によって肉体を制御する、あるいは肉体の鍛錬を手段として強健な精神を錬磨する、という枠組みである。戦後の体育学は、教師や上官からの命令を無批判に体現させることを是とした一方向的な訓育に対する反省を糧に、自ら主体的に思考し行動することを可能にするような、民主的人間形成の手段として再出発する。まずそれは、従来の体育学の立場を心身二元論的であるとして批判し、心身一元的なものの見方を有効な回答として見いだすのである。日本に伝統的な身体運用の思想に見られるような、心と身体が不可分に働く「心身一如」の境地は、それら体育学の重要な典拠となった<sup>7)</sup>。このような議論の延長線上に、近年では、従来の体育に加えて、音楽や絵画などの芸術領域と身体の教育を接続させる試みや、武道やスポーツを通じた試みなどのように、幅広い角度からの多様な実践が報告されている<sup>8)</sup>。また、ヨガやフェルデンクライスなどの身体活動、あるいは舞踏家や詩人によるワークショップなど、対象年齢を限らないそういった活動を広く「身体の教育」として見なすならば、「身体の教育」は学校という空間に限らず幅広く探求されているといえる。

ただし、しばしば指摘されるように、この一連の思想における、心身が一体であるような状態を盲目的に是認する態度については留意しなければならない<sup>9)</sup>。確かに、心身二元論がいく

つかの問題を引き起こしうる枠組みであることは多くの研究が指摘する通りであるが、だからといって、それを一方的に批判して心身一元論を擁護するだけでは、それ自体が再び強固な二元論を招く上に、本来取り扱うべき問題を見失うことになる。ここで検討したいのは、教育学の議論において、身体の働きが常に背景に沈んできたという点である。そもそも身体をめぐる教育は、前川峰雄の定義に見られるように、身体を通した教育として見なされてきた。例えば体育は「身体的活動による教育 (education through physical activities)」<sup>10)</sup>と定義づけられてきた。つまり身体の教育は、予め用意されたある価値に向かってパフォーマンスを鍛錬し、身体の実感を導くことを目標とした企てであると見なされてきたといえる。もし教育学が、従来の体育学に向けた省察を試みるならば、心身二元論を心身一元論によって刷新することを目指すだけでなく、身体運動とは縁のない規範を、身体を通して学習させる、という発想そのものをむしろ問い直すべきではないであろうか。この点を示唆している滝沢は、「心身一如の強調に終わることなく、その具体的な構造、すなわち『はたらき』としての身体の構造そのものへと目を向けなければならない」と述べ、「身体で分かる」といったような「実践知」を「身体の論理」と名付け、身体運動に内在する身体独自の働きを明らかにすることを体育学の課題とした<sup>11)</sup>。「心身二元論」の問題点は、精神と肉体との乖離／合一といった抽象的な水準にあるのではなく、むしろ身体の教育をとりまく枠組みそのものに伏在している。したがって本稿では、身体の教育をめぐる一連の議論において常に盲点となってきた、本来焦点となるべき当の身体の働きを明らかにすることに関心を向ける。もちろんそれは、既存の身体の教育を全面的に否定するものではない。そうではなく、心身問題という大きな論争によって覆い隠されてきた、日々の身体活動に絶えず生まれては消えていく豊かな意味を、耳を澄ませて掬い集める試みにほかならない。

もっとも、身体に備わるある種の自律性に対して「知」や「論理」として見なすことに対しては慎重になる必要があるように思われる。確かに、身体が言葉や自覚に先立って一連の運動が遂行されることは、日々の生活においても特殊な身体活動においても実感されることである。そこには自らの意思をもって活動するかのような身体がある。例えばマイケル・ポランニーが「暗黙知」と名付けたように、身体に対して主体性を見だし、身体に備わっている「知」を描写する見解には説得力がある。その上、「身体知」「実践知」に関心を向けた研究は現在、教育学に限らず社会学、認知科学、言語学など分野において幅広く注目を集めている。ただ、身体の自律性をもって「主体」（「知」、「論理」）であると解釈するのは、身体の経験を「知」という枠組みに当てはめる試みであり、その試み自体が身体の経験のすべてを汲み取るかどうかについては検討を加えなければならない<sup>12)</sup>。身体の働きを仔細に検討するならば、「知」を比喩としない、異なる種類の枠組みが獲得されてもよいのではないであろうか。

ただし、身体が「心身一元論」に働くものであれ、身体が「主体」であれ、身体の教育をめぐる議論においては、「生のかたち」は身体の経験を基礎にして作り上げられているというテーゼは広く共有されうる出発点である<sup>13)</sup>。あるいは、身体的な働きを抜きにしては学習が達成されないという点もまた、共有されうるべき前提である<sup>14)</sup>。そうであるとするならば、既存の課題を引き受け、身体の教育の可能性を構想するためにも、「身体が世界経験の基礎である」とする前提たるテーゼを再検討し、身体の働きをめぐる細やかなまなざしを提示することが求め

られるのである。

以下では、メルロ＝ポンティの哲学的身体論を典拠として、「世界経験の基礎」としての身体に改めて検討を加えていきたい。具体的には、フッサールの現象学から影響を受けたメルロ＝ポンティが、フッサールとは異なる観点を追求することで自身の現象学を展開した、その哲学的結節点に注目する。結論を先取りすれば、メルロ＝ポンティは、フッサールが提唱した「生活世界」の概念に対して、身体の働きを綿密に探求することによって、フッサール以上に「生活世界」に肉薄することになった。本稿の議論にとって重要なのは、メルロ＝ポンティが、身体という具体的な層への思索を進めることで、思想的に影響を受けたフッサールの現象学よりもある意味で細やかなまなごしを獲得できた、という思想的経緯である。その経緯を比喻として読み取ることで、心身二元論を中心とする大きな教育言説とは別に、身体そのものに肉薄することの教育学的意義を論証していく。次節では、メルロ＝ポンティがフッサールの「生活世界」の概念をいかに読み替えたかについて検討していきたい。

### 3. 「生活世界」から「生きられた世界」へ

メルロ＝ポンティが現象学に関心を持ったのは、フッサールからの影響に起因する。初期のメルロ＝ポンティが『行動の構造』や『知覚の現象学』を著すに当たって、フッサールの死後創設されたルーヴァンのフッサール文庫へと足を運び、当時未刊行であったフッサールの講義録やノートを参照し、1939年の時点でいち早く後期のフッサールの思想を読解したことはよく知られている<sup>15)</sup>。メルロ＝ポンティが着想を得た「生活世界」の概念もまた、フッサールの最晩年に属する論文集『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(*Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, 1936.)の中で定義されている。

フッサールにおいて生活世界とは、「学問以前の、…つねに問われるまでもない自明性のうちにあらかじめ与えられている感覚的経験の世界」<sup>16)</sup>を意味する。私たちにとってあるがままに与えられたこの経験の世界は、「現象学的還元」<sup>17)</sup>という方法を経て把握することが可能となる。把握の過程の中で私たちは、私たちにとって世界がいかに立ち現れてくるかを目の当たりにするのである。フッサールは、現象学的還元によって明るみに出されることになる世界定立の仕組みを、意識による「構成」と名付け、還元以前の、世界や事物を受け容れる私たちの素朴な態度を「自然的態度」と称した<sup>18)</sup>。現象学の使命とは、私たちの素朴な「自然的態度」を疑いかけ、自明性の覆いを取り払うことにあるとフッサールは考えた。

このような現象学の企ては、ひとえに思惟によって客体化された世界認識を思索の出発点としていた当時の哲学の状況、あるいは科学的世界観の広がりに対するフッサールの危機感に動機づけられている。フッサールは、当時の科学的な態度——事物を客観的に観察し、その純粋な性質を抽出することによって物の分析を遂行する態度——が科学技術の分野で大きな成功を収めたために、その態度が人間的事象にも適用され、私たちが生きる世界の真の姿が覆い隠されてしまっているという強い危機感をもっていた<sup>19)</sup>。「生活世界への帰還」とは、そのような科学的な態度を転換させ、事物が立ち現れるままの世界を取り戻そうとするためのフッサール

の打開策にはかならない。

ところで、フッサールの「生活世界」は、人間に与えられた経験の地平であるため、個人の世界として与えられることになる。ただしそこで想定される個人は、自らの能動的な活動によって世界を構成するような超越論主観性ではない。「生活世界」は「受動的に前もって与えられている」<sup>20)</sup> ために、そこにいる個人は、個的存在としての自己認識を得る先に、世界への受動的な内属を果たしている。世界に内属を果たしているのは身体であり、その受動的な内属が発端となって意識によって世界が構成されていくとフッサールは論じる<sup>21)</sup>。

フッサールにとって「生活世界」とは、「意識による構成」と対比される世界であって、重要なのは意識の構成が成り立つ仕組みを探ることにあつた。それゆえ、「生活世界」の提唱以後もフッサールは、「生活世界」から「構成」がいかんにして立ち上がるかについての考察を徹底させ、議論をより緻密にすることを追求していった。他方でメルロ＝ポンティの関心は、むしろ「生活世界」における経験の端緒を明らかにし、認識以前の世界をいかに掘り起こすかという点にあつた。そこでメルロ＝ポンティは、「生活世界」を、「意識」や「構成」との対比で論じられる世界ではなく、身体が働く世界として、すなわち「生きられた世界」として捉え直したのである。メルロ＝ポンティは、身体の経験に着目して綿密に記述することで、フッサール現象学において果たされなかった「生活世界」の記述を押し進めることになる。

#### 4. 「生きられた世界」としての「間身体性」

本節では、フッサールが「生活世界」における具体相のひとつとして取り上げた、身体的主観の問題をめぐってメルロ＝ポンティが記述した、身体の経験としての「間身体性」について検討していく。メルロ＝ポンティは「哲学者とその影」(*Le philosophe et son ombre*, 1959.) において、フッサール現象学の解釈を参照しながら、他者の認識をめぐる私たちの自然的態度を問い直す。私たちは他者とともこの世界を生きているが、その素朴な事実は他我問題という壁の前に、哲学における議論が困難であると見なされてきた。例えば「他者の痛みをいかにして知りえるのか」といった問いは認識論的哲学にとって長く難題であり続けた<sup>22)</sup>。メルロ＝ポンティは、現象学的な考察を進めるにあたって、個々人を単位とする素朴な認識論を否定し、他者を認識するのに先立って、自己と他者との境界が未だ未分化であるような現象野を見いだした。それが無人称的な「根源的なひと On primordial」<sup>23)</sup> である。「根源的なひと」とは、個人がそれぞれに、他者の与り知らぬところで私秘的な内面的世界をもつ、といった個人像でもなく、さりとて個性の奪われた群衆たる「特に誰とでもいうことのできない中性的」な「世間 das Man」<sup>24)</sup> でもないような、より根源的な無人称の人間存在を意味する。

「根源的なひと」に言及する以前に、メルロ＝ポンティはソルボンヌでの講義録「幼児の対人関係」(*Les relations avec autrui chez l'enfant*, 1951.) において以下のように論じる<sup>25)</sup>。

(他人経験において) われわれに与えられているのは、今日の心理学の用語で言うなら、〈私の行動〉と〈他人の行動〉という二つの項をもちながら、しかも一つの全体として働くような〈一つの系〉である。<sup>26)</sup>

メルロ＝ポンティは乳児が他者を認知するプロセスに関する心理学の研究を援用しながら、認知に先立つ他者との癒合的な状態に注目し、他者論を組み立てる。ここでメルロ＝ポンティが主張するのは、私たちが他者を経験する際に与えられているのは、一般に「私」や「他人」として分類される項ではなく、むしろそれらを含んだ一つの系であり、その系の中で私たちは私や他者を識別するようになっていくという事態である。メルロ＝ポンティは、人は他者との峻別以前に、すでに他者と癒合した状態を生きていると考え、他者認識の問題の立て方を逆転させた。

この癒合という着想をもとに、メルロ＝ポンティは「哲学者とその影」において「間身体性」の概念を発展させる。フッサールは『イデー』第二巻 (*Ideen zu einer reinen Phänomenologischen Untersuchungen zur Konstitution*, 1952.) の中で、世界の構成は身体の働きに方向付けられていることを、現象学的還元を通して明らかにし、私たちが物を認識できるのは、身体が身体として働くことに起因すると論じる。メルロ＝ポンティはそのことを踏襲し、以下のように論じる。

そこ(私の身体と私とのあいだ)にあるのは、私の身体の身体自身に対するある関係であって、これが私の身体を私と物との絆たらしめているのである。たとえば私の右手が私の左手に触れるとき、私は左手を「物理的な物」として感ずるが、しかし同時に、私があるのにならば、まさしく、私の左手もまた私の右手を感じはじめる、「それが身体になり、それが感じる」という異様な出来事が起こるのだ。<sup>27)</sup>

メルロ＝ポンティによれば、同じ一つの身体が「触れる」と同時に「触れられる」と感ずる出来事を経て初めて、物の知覚が可能になるのである。逆に、もしも私たちの眼が「或る種の動物のように側眼になっていて、二つの視野を混ぜ合わすことができない」とすれば、つまり自分の身体が「自分を顧ることのありえない」ものであるとしたならば、この身体は自己を感じることがないであろう<sup>28)</sup>。つまり、触れる身体が触れられる、あるいは触れられる身体が触れるといった経験を通して初めて、私たちは自己の身体を再帰的に知覚し、知覚という経験を把握することができる。身体が物に触れるという経験の背後には、物に触れられるという経験が潜在しているのであって、世界の構成はこの感覚的経験によって作用し得るのである。このような能動と受動とが交差し合う感覚的世界こそ、未だ自己の輪郭が形成されぬ、人称化以前の「根源的なひと」の世界である。

「哲学者とその影」においては、このような感覚的世界の分析が敷衍され、他者の認識に関する議論が展開される。

私の身体が「感ずる物」であり、それが触発されうるということを学び知ることによって、私は他の生命体や、おそらくは他の人間もいるということを理解する準備を整えたことになるのだ。…もし私が他人の手を握りながら、彼のそこにいることについての明証をもつとすれば、それは、他人の手が私の左手と入れかわるからであり、私の身体が、逆説的に

も私の身体にその座があるような「一種の反省」のなかで、他人の身体を併合してしまうからなのである。私の二本の手が「共に現前」し「共存」しているのは、それがただ一つの身体の手だからである。他人もこの共現前 *compresence* の延長によって現れてくるのであり、彼と私とは、言わば同じ一つの間身体性 *intercorporéité* の器官なのだ。<sup>29)</sup>

ここでメルロ＝ポンティは、右手と左手との「触れる—触れられる」という関係が、人と人との間でも起きると分析する。意識が未だ立ち上がっていない領野において、私の手が他者の手に触れた時、私の身体は、はじめて他者がそこにいることを知覚すると同時に、私の身体の現れにも気づくのである。メルロ＝ポンティは、自己の身体を知覚に関する分析を拡張して他者の知覚に関する分析を試み、「自分の右手に触っている私の左手に触るのと同じように、私はそこにいるその人が見ているのを見る」<sup>30)</sup>と読み込むことによって、他者認識の原初的経験を描き出した。他者と私とが「同じ間身体性の器官」であって、同じ世界の内に身を浸しているからこそ、私たちは他者に出会うことができる。その意味で、最初の他者経験は認識的というよりはむしろ行為的なものであって、「他人の身体や他人の実存を理解することができ [るのも]、「私がなしうる」ということと「他人が実存する」ということが、「同じ世界に属する」ことによって理解されるのである<sup>31)</sup>。

感覚を重視したこのような分析を前に、私たちは戸惑いを覚えるかもしれない。たしかに私の手と他者の手とが互換し合うという事態は、物理的な知見を持ち出すまでもなく容易に否定することも可能であろう。しかしながら、メルロ＝ポンティは身体に生ずるいわゆる客観的な事実を論じているわけではない。ここでの現象学的記述とは、身体感覚に立ち返って他者との出会いを分析したときの、ありのままの経験を描き出すことにほかならない。

したがって重要なのは、真偽の判断ではなく、他者の認識に先立つ出来事を救い取るメルロ＝ポンティのまなざしである。つまり、私たちは自己の身体の再帰的な知覚を通して、物や世界をそれとして経験することが可能になるのであって、その経験から出発して生を形作っていく、というあり方に、私たちはメルロ＝ポンティの記述を受けて辿り直すことができるのである。それは、私たちの素朴な自然的態度、例えば他者に出会うといった事実や、他者とともに作業を進めるといった営みに、いつも働きながら常に潜在している身体の経験を確かめることを可能にするまなざしである。生きられた身体の経験の描写それ自体が、私たちを世界との原初的接触へと連れ戻すような文体によって、フッサールの「生活世界」への探求を展開することが可能となったのである。

## 5. 「見る」という経験

「間身体性」についての記述を今一度検討するために、類似したメルロ＝ポンティの分析を取り上げたい。前節で取り上げたのは他者に対する身体の経験であったのに対して、以下で取り上げる記述は物に対する身体の経験である。

メルロ＝ポンティは後期の著作『眼と精神』(*L'œil et l'esprit*, 1964.)において、物を見るということに覆い隠された自明性を剥ぎ取り、画家が世界を見る／描くという営みに着目しな

がら身体の原初的な経験を記述していく。その自明性とは、見る私と見られる物というそれぞれ独立した要素が前提となって、物を見る経験が成立すると信じる自然的態度を指す。

例えばレンブラントの『夜警』<sup>32)</sup>に描かれる首領の左手を見た時、私たちはそれがあたかもこちら側に向かって差し出されているように感ずるのを了解することができる。それが可能になるのは、何も絵に対して距離計算をした時ではなく、また想像が膨らんだ時でもなく、「首領の身体に映っている手の影が、同時にその手の横の面を感じさせる時」<sup>33)</sup>である。メルロ＝ポンティによれば、物の出現は、「影」や手の「横の面」といった、こちらから見ることのできない裏の面が、こちらからのまなざしに対して「おのれを隠す」ことによって可能となる。私たちの眼は、見える物を見るときに、見えない裏側をまなざすことができるからこそ物を物として見ることができる。見ることは、眼の前に対象として置かれている物に対して、その表象を獲得するというといったような知的作業なのではなく、むしろ「物に住み着く」<sup>34)</sup>といった、物あるいは世界へ内属していく私たちの生のありようを開示している。それは、私が「世界の織目の中に取り込まれている」ことによって、あるいは「世界が身体という生地で仕立てられている」ことによって可能になるのである<sup>35)</sup>。

画家アンドレ・マルシャンは、世界と私との能動的かつ受動的な絡まり合いを体験し、「森のなかで、私は幾度も私が森を見ているのではないと感じた。樹が私を見つめ、私に語りかけているように感じた日もある」<sup>36)</sup>という報告を残している。これに注目したメルロ＝ポンティは、「樹が私を見つめ」る、あるいは、「空間そのものが私の身体を通して自己を感ずる」といった、私の世界に対する能動的かつ受動的である、両義的に絡まり合った関係を丹念に描き出す。

一般に、〈靈気を吹き込まれる inspiration〉と呼ばれているものは、文字通りに受けとられるべきである。本当に、存在の吸気とか呼気 *inspiration et expiration de l'Être* というものが、つまり存在そのものにおける呼吸 *respiration dans l'Être* があるのだ。もはや何が見、何が描かれているのかわからなくなるほど見分けにくい能動と受動とが存在のうちにはあるのである。母の胎内にあって潜在的に見えるにすぎなかったものが、われわれにとってと同時にそれ自身にとっても見えるものとなる瞬間、一人の人間が誕生したと言われるが、(その意味では)画家の視覚は絶えざる誕生なのだ。<sup>37)</sup>

つまり、見るという経験とは、見る私と見られる物とが独立に前提されて開始されるのではなく、私と物とを最初から含み込んだ存在 *l'Être* において生じる運動であって、そこでは能動と受動とが複雑に絡まり合いながら動いているとメルロ＝ポンティは記述する。このような錯綜した事態は、身体の両義性に由来する。眼は「見るもの」でありながら、物として「世界の生地」の一部なのであるから、それ自体が「見えるもの」のうちに浸透している。画家の仕事とは、私たちを素朴な物の認識から解き放ち、改めて物との錯綜した関係の中に引き込み、その上で再び物を見るという経験を引き起こさせることにある。画家は、それ自体では実在するものではない「光・明るさ・影・艶・色彩」といった手がかりを「物に尋ねる」とによって引き出し、「秘かで熱っぽい〈物の出現〉」を目指しているのである<sup>38)</sup>。絵画とは、私たちの身体と世界との原初的結びつきの表現にほかならないメルロ＝ポンティは考える。



眼前に物が現れることをめぐる私たちの素朴な態度を問い直し、身体の働きをつぶさに記述してみれば、物を見るという経験の意味を掘り下げることができる。メルロ＝ポンティが描き出したのは、世界を上空飛行的に俯瞰して獲得される客観的な知を否認した代わりに、一つの世界の内の動きが、眼となり物となっていくながら、再び一つの世界に癒合していく、その耐えざる往来を果たす画家の姿である。その姿は、フッサールが「間身体性」という語に託した意義を超えて、「生きられた世界」の風景の一つとして現象学の考察に加わったのである。

## 6. 「間身体性」の教育学的意義

以上、身体の原初的な経験に向けられたメルロ＝ポンティの記述を検討してきた。最後に、このような議論に潜在している教育学的意義を検討したい。フッサールが提唱した生活世界の探求の試みは、メルロ＝ポンティに至っては身体を経験の記述という作業に置き換わった。メルロ＝ポンティがフッサールから受け継いだのは、自然的態度による物事の素朴な認識を問い直す使命であった。そこで明らかになる、メルロ＝ポンティが「原初的」と形容した身体のありようは、繰り返し述べているように、身体をめぐる客観的な事実ではない。それは、他者の手に触れる事態であれ、物を見る事態であれ、私たちがその記述によって自らの身体を経験を問い直すような、身体において実現される経験の諸相である。身体を経験を問い直した私たちは、その経験を包み隠していた自明性を疑い、世界に開かれる新しい経験を獲得することができる。還元すれば、メルロ＝ポンティの「記述」という試みは、自然的態度における様々な自明性の覆いを剥ぎ取り、「驚き」をもって世界を生き直す企てにほかならない。ただしそのような「驚き」による発見そのものが新たな自明性へと移行し、身体を経験は再び新たな自明性によって覆い隠されていく。メルロ＝ポンティが述べたように、身体を経験の記述そのものが新たな経験と新たな自明性をともに生み出すものであるという点において、「[現象学的] 還元の最も偉大な教訓とは、完全な還元は不可能だということ」<sup>39)</sup>といえる。もっとも、「不可能であること」は同時に、「自己の絶えざる更新の経験」が獲得される条件でもある。筆者は、身体を経験の変容をめぐるこの未完結性に、教育的営みとしての意義を見いだせると考える。これまで構想されてきた多くの「身体による教育」においては、予め学習すべき内容と学習後の効果とが予測済みであるということが前提になっている。しかしながらそのような前提の内では、自明性の覆いが破られることなく保持され、世界の経験に「驚き」を体感することに重要な意味は付与されない。それとは反対に、あえて身体を経験の未完結性を引き受けることによって、身体において常に感得され続けている経験——例えば他者と出会い、物を見ること——の豊かさに「驚き」を感じることは、身体的教育の一つの可能性といえるのではないであろうか。

なお繰り返し述べるように、メルロ＝ポンティの「記述」は、客観的な事実の証明を目指すものではない。あくまで世界と自己との関係を問い続ける試みであって、現象学的世界とは、「先行しているはずの或る存在の顕在化ではなくて存在の創設であり、哲学とは、先行しているはずの在る真理の反映ではなくて、芸術と同じく在る真理の実現」<sup>40)</sup>なのである。画家が絵画を通して世界の見え方を開示するのと同じく、哲学もまた、世界の見方を新たにすると

言える。その意味では、哲学的な探求は世界の見方を変えるという点で、身体の修養や稽古とは異なって、迂遠な道のみでありながらも人間に変容をもたらす優れた教育的営みであるように思われる。換言すれば、身体の教育は、通常は身体の教育とは見なされないような知的な思索も含んだ、総合的な経験の更新の営みと考えられるのである。身体的世界をめぐる「真理」の探求は、身体経験に立ち返ることが要求されると同時に、それ自体が身体を経験を更新させるような文体で記述する、徹底した知的努力にもまた裏付けられなければならない。自己と世界との乖離を否認しつつ、かつ他方で自己と世界との安易な合一をも否認する態度を忘れては、再び二元論と一元論とをめぐる論争を引き起こすことになる。メルロ＝ポンティが「錨」という言葉に託した意志は、自己と世界との癒合と、自己と世界との離別を行き来する人間のあり方を、どちらに傾くともなく追求し続けることによって受け継がれるべきである。

以上の考察によって、身体の教育を構築するためには、身体における経験の豊かさを拾うことの意義が示唆されたのではないであろうか。また同時に、その考察を可能にする哲学的思索もまた、それ自体がすぐれた実践であることが明らかになった。この観点は、理論と実践との乖離が指摘されることの多い現状に対して一つの回答を提起するものであり、また同時に、身体を通じた教育を支えてきた発想の枠組みに対しても、一つの視点を投げかける企てである。身体の他の経験についての記述、あるいは具体的な身体運動の追求など、本稿で取り扱えなかった点については今後の課題とし、まずは現象学的身体論と教育学との意義ある接近を確認し、稿を閉じることとする。

## 注

- 1) Merleau-Ponty, Maurice. *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945, p.ix. (竹内芳郎・小木貞孝訳『知覚の現象学』1、みすず書房、1967年、p.13.)
- 2) 西岡けいこはこの点に関して、「教育技術の改良」をもたらすことに終始する教育実践を問題視し、示唆に富む論を表明している。(西岡けいこ「脱自あるいは教育のオプティミスム——ソルボンヌ講義を起点とする肉の存在論の教育思想的意義」『現代思想』36巻16号、2008年、p.347.)
- 3) 「身体とは、世界のなかへのわれわれの投錨 *notre ancrage* のことなのである」。これは、「世界内存在 *l'être au monde*」としての人間の実存を身体の働きに見て取ったメルロ＝ポンティによる身体理解である。Merleau-Ponty. *ibid.*, p.169. (竹内・小木訳、同書、p.242.)
- 4) 川村英男『体育原理』杏林書院、1974、p.84.
- 5) なお体育とは異なる地平で身体をテーマにした研究も多い。例えば、社会をマクロに捉え、例えばミシェル・フーコーによる権力論の立場から考察を進めるものがある。(田中智志「主体身体という装置——フーコーの批判的存在論——」『駒澤大学文学部研究紀要』53号、1995年、pp.19-48.) それは大きな課題であるが、本稿においてはそれらとは異なる文脈で考察を進めていく。
- 6) 川村、同書。
- 7) 湯浅の身体論はその代表的な典拠である。湯浅泰雄『身体』創文社、1977年。
- 8) 樋口聡による「身体感性論」の提唱は、そのような実践を包括する理論的基盤を構築する取り組みであるといえる。樋口聡『身体教育の思想』勁草書房、2005年。
- 9) 例えば、以下の樋口の観点はこの問題を端的に分析している。「これまでのいわゆる心身関係論といった企ての背後には、精神と身体の間にある種の価値序列を持ち込むイデオロギーが潜在しているのであり、批判されるべきなのはこのイデオロギーなのである。その批判は、心身の価値序列の転倒に至るのでもなければ、いわゆる心身一元論へと向かうのでもない。とい

- うのは、単純な価値序列の転倒であれば、それはやはり同じイデオロギーを共有することになってしまうからである。」(樋口聡「現代学習論における身体の地平——問題の素描」『広島大学教育学部紀要・第一部, 教育学』46号, p. 282.)
- 10) 前川峰雄『体育学原理』改訂版、中山書店、1958年、p.115.
  - 11) 滝沢文雄「『身体の論理』序説——前川峰雄の身体観を手がかりに」『体育学研究』31巻2号、1986年、p.107. なお、このような関心は、教育学に限らず認知科学・言語学・社会学・人類学などの領域で広く探求されつつある。(Francisco Varela, Evan Thompson, Eleanor Rosch, *The embodied mind*, MIT Press, 1991. Polanyi, Michael. *The tacit dimension*, Doubleday, 1966.)
  - 12) この点は、筆者の力量と本稿の射程を大きく越える問題圏に含まれているため、子細な検討は今後の課題としたい。ただ、身体の働きをめぐる議論が「知」という比喩に換言されてしまう傾向が、認識論的哲学において躓きの石となった「主体—客体」の分離の問題を、再び抱え込むことになる可能性については留意しなくてはならないと付言しておく。もっともそのことは、言うまでもなく、昨今の「実践知」をめぐる研究の価値に対する批判を意図したものではない。
  - 13) 例えば、矢野は以下のように記述する。「身体は、環境に適応するための道具の使用にとどまらず、自己自身、世界、他者に開かれ意味の成立する場である」(矢野智司『子どもという思想』玉川大学出版部、1995年、p. 55.)
  - 14) 例えば、佐藤は以下のように論じる。「どんな知識も学び手の身体的な活動に具体化され、学び手の経験の中に織り込まれることなしには、『学び』としての意義をもちえないだろう」(佐藤学『学びの身体技法』太郎次郎社、1997年、p. 19.)
  - 15) H・L・ヴァン・ブレダ、前田耕作訳「モーリス・メルロ＝ポンティとルーヴァンのフッサール文庫」、現象学研究会編『現象学研究』創刊号、せりか書房、1972年。
  - 16) エドモンド・フッサール、細谷恒夫・木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』みすず書房、1974年、p. 106. (原題 *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, 1936.)
  - 17) 現象学的還元とは周知のように、世界や事物が私たちの周りにある見なす素朴な態度を括弧に入れ、世界や事物がそのようにあると信じている私たちの意識の構造を明らかにする方法である。エドモンド・フッサール、渡辺二郎訳『イデーニ I-I』みすず書房、1979年、p.125. (原題 *Ideen zu einer reinen Phänomenologische Untersuchungen zur Konstitution*, 1913.)
  - 18) 同上
  - 19) フッサールは、「理性」への信頼が崩壊しつつある20世紀初頭の哲学状況を鑑み、「われわれ現代人は、懐疑の大海に没しきって、われわれ自身の真理を放棄するという最大の危険の中に身を置いている」と論じる。(フッサール、細谷・木田訳、同書、p. 28.)
  - 20) フッサールにおける受動性の概念はやや錯綜した構造にあるため、能動／受動の単純な二項対立では捉えられない。ただしここでの受動の意味は、対象を構成する超越論的主観性の能動的な働きに先立つ受動的先構成の次元、という基本的な構図で捉えて差し支えない。
  - 21) なお後期のフッサールは、現象学をある錯綜した袋小路に押しやってしまう。袋小路とは、現象学的還元に向かわせる意識の働きを、「生活世界」自身の要求として見なしたことにある。つまり、「生活世界」自身が自らを基礎づけることを引き受けなければならず、エビステーメーに対する基礎としての要求をドクサに求めるという奇妙な事態が導かれてしまう。ただしこの点はメルロ＝ポンティによって肯定的に評価されることとなる。この事情についてはU. クレスゲス「フッサールの『生活世界』概念に含まれる二義性」(新田義弘・小川侃編『現象学の根本問題』晃洋書房、1978年)に詳しい。
  - 22) 現在においては様々な立場から斬新な解釈が試みられている。例えば、浜渦辰二「他者と異文化—フッサール間主観性の現象学の一側面—」『哲学年報』49号、1990年、pp. 289-314.
  - 23) Merleau-Ponty, *Le philosophe et son ombre*, Signes, Gallimard, 1959, p.221. (竹内芳郎・木田元・滝浦静雄ほか訳「哲学者とその影」『シーニュ2』みすず書房、1970年、p.29.)

- 24) ハイデガー、細谷貞雄訳『存在と時間』上、筑摩書房、1994年、p.227。(Heidegger, Martin. *Sein und Zeit*. 9. unveränderte Aufl. Niemeyer, 1960.)
- 25) 「幼児の対人関係」は、メルロ＝ポンティがパリ大学文学部（ソルボンヌ）時代に行った講義録の一つである。メルロ＝ポンティは、1949年から1952年までの三学年間で児童心理学および言語学を現象学的な観点から検討を加えた独創的な講義を展開していった。
- 26) Merleau-Ponty, *Les relations avec autrui chez l'enfant*, In-house reproduction, 1951. p.32. (滝浦静雄・木田元訳「幼児の対人関係」『眼と精神』みすず書房、1966年、pp.135-136.)
- 27) Merleau-Ponty, *Le philosophe et son ombre*, p. 210. (竹内・木田・滝浦訳「哲学者とその影」、p.15.)
- 28) Merleau-Ponty, Maurice. *L'oeil et l'esprit*, Gallimard, 1964. p.20. (滝浦静雄・木田元訳『眼と精神』みすず書房、1966年、p.259.)
- 29) Merleau-Ponty, *Le philosophe et son ombre*, p.212-213. (「哲学者とその影」 pp.17-18)
- 30) Ibid., p.215. (同上、p.21.)
- 31) Ibid., p.221. (同上、p.29.) なお、[ ] の注は筆者による。
- 32) Rembrandt Harmensz. van Rijn, 1606-1669.『夜警』とは、正確には『フランス・バニング・コック隊長とウィレム・ファン・ラウテンブルフ副隊長の市民隊』(*De compagnie van kapitein Frans Banning Cocq en lieutenant Willem van Ruytenburgh.*) を指す。
- 33) Merleau-Ponty. *L'oeil et l'esprit*. p.29. (滝浦・木田訳『眼と精神』、p.265.)
- 34) Ibid., p.9. (同上、p.253.)
- 35) Ibid., p.20. (同上、p.259.)
- 36) Ibid., p.31. (同上、p.266.)
- 37) Ibid., pp.31-32. (同上)
- 38) Ibid. (同上)
- 39) Merleau-Ponty. *Phénoménologie de la perception*. p.viii (竹内・小木訳『知覚の現象学』1、p.13.)
- 40) Ibid., p.xv. (同上、p.23.)

## 【引用文献】

- Bourdieu, Pierre. *La distinction: critique sociale du jugement*, Éditions de Minuit, 1979. (石井洋二郎訳『ディスタクシオン I』藤原書店、1990年)
- Heidegger, Martin. *Sein und Zeit*. 9. unveränderte Aufl. – Niemeyer, 1960. (細谷貞雄訳『存在と時間』上、筑摩書房、1994年)
- Husserl, Edmund. *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, 1936. (細谷恒夫・木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』みすず書房、1974年)
- , *Ideen zu einer reinen Phänomenologischen Untersuchungen zur Konstitution*, 1950. (渡辺二郎訳『イデーニ I-I』みすず書房、1979年)
- , *Ideen zu einer reinen Phänomenologischen Untersuchungen zur Konstitution*, 1952. (立松弘孝・別所良美訳『イデーニ II-I』みすず書房、2001年)
- Merleau-Ponty, Maurice. *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945. (竹内芳郎・小木貞孝訳『知覚の現象学』1-2、みすず書房、1967年-1974年)
- , *Le philosophe et son ombre, Signes*, Gallimard, 1959. (竹内芳郎・木田元・滝浦静雄ほか訳「哲学者とその影」『シーニュ 2』みすず書房、1970年)
- , *Les relations avec autrui chez l'enfant*, In-house reproduction, 1951. (滝浦静雄・木田元訳「幼児の対人関係」『眼と精神』みすず書房、1966年)
- , *L'oeil et l'esprit*, Gallimard, 1964. (滝浦静雄・木田元訳「眼と精神」『眼と精神』みすず書房、1966年)
- Polanyi, Michael. *The tacit dimension*, Doubleday, 1966.

- Varela, Francisco. Thompson, Evan. Rosch, Eleanor. *The embodied mind*, MIT Press, 1991.
- H・L・ヴァン・ブレダ、前田耕作訳「モーリス・メルロ＝ポンティとルーヴァンのフッサール文庫」、現象学研究会編『現象学研究』創刊号、せりか書房、1972年。
- 川村英男『体育原理』杏林書院、1969年。
- 滝沢文雄『「身体」の論理』序説——前川峰雄の身体観を手がかりに』『体育学研究』31巻2、1986年、pp.101-111.
- 佐藤学『学びの身体技法』太郎次郎社、1997年。
- 田中智志「主体身体という装置——フーコーの批判的存在論——」『駒澤大学文学部研究紀要』53号、1995年、pp.19-48.
- 西岡けいこ「脱自あるいは教育のオプティミスム——ソルボンヌ講義を起点とする肉の存在論の教育思想的意義——」『現代思想』36巻16号、2008年、pp.347-357.
- 新田義弘・小川侃編『現象学の根本問題』晃洋書房、1978年。
- 浜渦辰二「他者と異文化—フッサール間主観性の現象学の一側面—」『哲学年報』49号、1990年、pp.289-314.
- フィンク、オイゲン、新田義弘・小池稔訳『フッサールの現象学』以文社、1982年。
- 樋口聡「現代学習論における身体の地平——問題の素描」『広島大学教育学部紀要・第一部、教育学』46号、pp.277-285.
- 樋口聡『身体教育の思想』勁草書房、2005年。
- 前川峰雄『体育学原理』改訂版、中山書店、1958年。
- 矢野智司『子どもという思想』玉川大学出版部、1995年。
- 湯浅泰雄『身体』創文社、1977年。

(臨床教育学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日)

## Educational Significance of ‘Intercorporéité’ in Merleau-Ponty: Reconsidering the Education of the Body

OKUI Haruka

This paper aims to reconsider the education of the body, by referring to the phenomenological framework of Maurice Merleau-Ponty (1908-1961). Many interests in the body among educational studies have been given to changing bodies or improving performances as the education of “through the body.” On the other hand, works of the body, according to Merleau-Ponty’s framework, are the base of the experience of the world, which has already moved before a reflective subject thinks about world. If it is so, we can understand that these works of the body have been beyond our educational attempts or intentions. In this paper, I describe these works of the body, which provides a perspective to its education. To explain this perspective, I first consider the influences of Husserl to Merleau-Ponty, who expands and deepens the basic framework proposed by the Husserl’s phenomenology, especially about the idea of “Lebenswelt” transforming to “le monde vécu.” Second, I investigate the concept of “intercorporéité,” which is regarded as a key concept in describing the experience of the world. In conclusion, I reconsider the education of the body by claiming the educational significance of the concept of “intercorporéité” and the phenomenological mode of thought in educational studies.